

■研究・実践の課題（テーマ）

食品成分表示におけるアレルギーや宗教戒律などユニヴァーサルデザイン的配慮を踏まえた誰にでも理解できる国際ピクトグラムの研究

■主任研究者 川原啓嗣

■共同研究者 黄ロビン、尹成濟、西野圭一郎、中藤寛子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックまでに訪日外国人観光客数を年間 4000 万人に増やす政府目標が掲げられており、競技施設だけでなく周辺の駅や道路環境をユニヴァーサルデザインの考えで整備すると安倍首相も明言しているが、駅コンコースにおける誘導サインの見直しや多言語表示などの方針が出されているものの、観光客が滞在する宿泊施設やレストラン等飲食店における受け入れ体制はまだ未整備である。

本研究では「食のユニヴァーサルデザイン」からのアプローチとして、食事を提供するホテルや旅館、そして街中のレストランや居酒屋での、言語の異なる様々な外国人とのコミュニケーションにおいて有効なピクトグラム（絵文字）の研究開発と国内外の関係機関の協力で行うアンケート調査（ネット調査）による検証を通して、空港や駅に設置された観光案内所やインターネットのホテル・レストランガイドラインでも活用され、飲食店の看板やメニューにも利用できるピクトグラムの国際モデルを提案することが目的であり、その結果として外国人だけでなく障害者や高齢者を含め広く一般の市民にも喜ばれる生活環境づくりに貢献できれば幸いである。

【方法】

昨年度の研究を踏まえ、2017 年度はピクトグラムが使用される場として外国人が多く出入りする空港に着目し、空港のレストランの案内表示について調査を行なった。調査対象となった中部国際空港では、フードコートマップや、空港内で配布されている各言語対応の紙媒体のマップにも、特に食品アレルギー対応の表記はなく、総合案内所、旅行代理店で関連資料の有無を聞いたが確認できなかった。結局、空港内でアレルギー対応が見られた店は中華料理屋の 1 店舗のみで、メニューに「日本語」で記載されていた。名古屋市内の旅行代理店にも問い合わせたが、観光サイトでのレストランの紹介はあるが、あくまでグルメ情報の掲載であった。海外からの玄関口となる空港や観光施設でこそ、まずアレルギー、宗教対応等の検討をすべきではないかと考え、以下の 3 案を提言案として考察した。

1. 案内所等で配布される紙のマップにアレルギーや宗教対応を行なっている飲食店を表示する。
2. 飲食店の店頭にアレルギー、宗教対応のマークを掲載する。
3. アレルギーや宗教対応の種類ごとに作成された表示マークのデータを、公開サイトからダウンロードし、飲食店が自由にメニューに印刷、またはシールを貼るなどの活用ができる仕組みを提案する。